

「外部リソース活用研究事業」

研究成果報告書

学校 番号	31	学校名	郡上北高等学校	課程	全日制・定時制・通信制
----------	----	-----	---------	----	-------------

研究主題	主体的に生きていくことができる人材の育成
------	----------------------

1 3年間の事業の概要

本校は山間部に位置し、閉鎖的コミュニティで生活を送っている。そのため視野が狭く、決定すべき事柄の選択肢が限られたものになっている。また、大学や専門学校などの関わりが乏しいため、専門的な内容を学ぶ機会に乏しい。また、自発的に取り組むことが苦手な生徒に様々な経験の機会を与えることで、自分らしい生き方を考えさせたい。

こういったことを解決するため、高等教育機関で講義を受けたり、企業とのプロジェクトを取り組んだりすることで、より専門的な知識を学び、多くの人との関わりから視野を広げ、学んだことが自信となり、主体的に生きていくことができる人材を育成した。

また、本校の生徒の約半数は郡上市市内での就職を希望しており、将来は地域を支える人材となり、さらには親の介護も担うこととなる。そのため、よりよい地域のあり方を創造するためにも福祉的視点と技術をもった人材の育成は、地域のニーズとも合致するところである。本校でも介護等を体験的に学ぶ学習環境の整備を行い、地域に視野を広げた学習を展開する試みを始めたところである。今後は地域との連携により継続的に福祉の知識と技術を学ばせ、社会に出てから必要となる礼節・マナーや知識・技能を獲得させ、卒業後に地域を支える即戦力になるための教育を行った。

2 3年間の取組（実施した内容）

(1) クエストエデュケーションプログラム

社会的・職業的自立を促し、望ましい勤労観・職業観の育成を図るキャリア教育の支援で先進的な取り組みをしている学校を調べ、平成25年度に東京都立千早高等学校（以下千早高校）を視察した。千早高校は、社会問題に関心を持たせると共に、どのように解決していくのかをグループで話し合わせ、自らの考えを人に伝えること、また意見交換をすることで自らの考えを熟成させていく実践を行っていた。その1つに企業との関わりから勤労観を学ぶことができる教材である、教育と探究社の「クエストエデュケーションプログラム」を紹介していただいた。大和ハウスやオムロンなどの有名企業から与えられる課題をクリアすることで、働くことの意義、働くことの楽しさ・厳しさ、そして、自分に向いている仕事はなんだろう、と働くこと全般について考えることができる教材をキャリア教育の担当者に紹介していただいた。その他、導入校である東京都立芦花高等学校も視察し、実際に生徒がクエスト（企業が与える課題）に取り組む様子を参観した。

本校の生徒の気質は郡上市の山間部にあるためか閉鎖的な風潮があり、なれ合いの人間関係で過ごし、考えたことをうまく言葉で表さなくても物事が進んでしまう傾向にある。就職希望者が半数を占める本校にとって、社会に出たときにうまくコミュニケーションが取れないことは最も心配なことであり、早急に解決する必要がある。地元企業と連携することも考えたが、まったくこれまでつながりのない人達と関わっていくことが、本校の生徒にとって一番良いことだと考え、クエストエデュケーションプログラムの導入を決めた。

クエストエデュケーションプログラムは全23時間で実施をする。生徒ごとにIDが付与され、教員は

全ての生徒のIDをコントロールすることができる。教師は支援者として、マニュアルに従って動画を流すことぐらいで、後は生徒に任せる（むしろ任せなくてはならない）。何回もリハーサル発表をしていく中で、生徒ごとに相互評価をし合い、またメンバーが聞き手に回るなど工夫をして、プレゼンテーションの分かりやすさを客観的に評価する。また、企業の方が実際に本校に来校してくださるので、実際のビジネスとして成立するのかなど、教師とは別の視点で評価をする。そういった経験から生徒は大きな成長していくのである。

特に生徒の成長を感じるのは、「考えたことを言葉にすること」、「お互いに意見を言い合って交流することで答えを導き出していくこと」、「それを相手に伝わるように表現すること」である。またビジネスアイデアも、東京に本社がある企業に客観的に評価をしてもらえるのも生徒にとっては大きな刺激になる。非常に厳しい意見をいただきながら、まったく何も無いところから新しいビジネスを創造でき、それを直接企業に提案できるのは貴重な体験である。今後は、電通新聞局にご紹介いただいた47CLUBのご支援を受け、実際の商品開発を参考にし、1年間かけて郡上市北部の特産品を作り出すプロジェクトを進めていく。

プログラムを修了した際の生徒の感想は、取り組んで良かったという意見ばかりであった。また、アイデアを出すことや、そのアイデアを交流させることで、クラスやチームの絆が深まったという意見が多くあった。今年度のプログラムを修了した生徒の感想を抜粋する。

- ・今日は、プレゼンテーションを行った。自分たちのチームが発表する前にほかのチームのプレゼンを見た。どのチームも練って練って絞り出した案をどのようにすればいいか考えた最高傑作のプレゼンだったと思う。グループで発表だけど一人一人の個性が出ていて、すごくてなんかプレゼンに感動してしまった。やはり、すごい。そして、自分たちのグループのプレゼンの番。自分たちのグループは、最初からいい案がなかなか出なくて、プレゼンの日程が近づくにつれ追い込まれた。確かにどのグループも苦労したとは、思うけど、自分たちのグループが一番苦労したと思う。でも、いい案が出てプレゼンもすごいのを考えて、いざ、プレゼンに臨んだ。いままで一番良かったと思うし、最高傑作だったと思う。本当に上手く行って良かったと思うし、グループやクラスの絆がもっと深まったと思う。
- ・発表すごく緊張しました。今回、クエストエデュケーションをやってみて、いままで一つの企業に関して深くまで調べようとしていたり、知ろうとしなくて、無関心なところがあったけど、クエストエデュケーションをやることになって、どんなアイデアがいいだろう、こんなアイデアはどうだろうか、などクラスの人、チームの人と多く交流できたことでいいプレゼンになったと思っています。クエストエデュケーションをやってよかったと思っています。

昨年度クエストエデュケーションプログラムを受けた平成26年度卒業生に、進路先でクエストエデュケーションプログラムの経験がどのように役立っているかを追跡調査した。

- ・自己紹介でプレゼンテーションをする時に、うまく話すことができるし、どうすればアピールできるか、またどういう流れで発表すればよいか分かった。他の人の発表の良し悪しも分かるようになった。また、コミュニケーション能力が他の人より高いと感じた。（私立四年制大学・男子）
- ・クエストエデュケーションプログラムでは、何回もレポートの発表で人前に立つ機会があったので、大学でも発表する時は、自分が他の人より慣れていると感じた。（公立短期大学・男子）
- ・人と話すときに言葉に気を使えるようになった。地元を離れて初対面の人と接するようになったけど、これまでみたいな話をしても通じないことが分かったし、自分の意見をしっかりと言わなければいけないと思った。（専門学校・男子）
- ・クエストエデュケーションプログラムでは、1つの課題に向けてチーム内でコミュニケーションを取りながら取り組んだ。企業でも「カイゼン」といって、チームで課題を見つけ解決するために意見を言わなくてはならないので、経験が社会に出てからも生きていくと感じた。（就職・男子）

(2) 地域にある社会資源を活用した特別講義

ライフデザインコースでは、家庭専門科目に関連した授業（「生活と福祉」「生活教養」「フードデザイン」）において、地域の方々を招いての特別講義を実施し、障がいへの理解を深めながら福祉的視点を養う活動を行った。その結果、地元の高齢者施設へ就職する生徒も増え、地域福祉に貢献する人材を輩出できるようになった。

- ・平成25年度は専門科目を学ぶための施設、設備がなかったため、本事業において地域へ出向いての福祉体験プログラムを実施した。
- ・平成26年度～27年度においては、総合実習室を新しく設け、地域の福祉機器取り扱い業者の協力を得ながら介護用ベッド等を設置し、充実した介護実習を定期的に行うことができるようになった。

<実施した特別講義（抜粋）>

○「みんな同じで、違っていい ～車いすから見える世界～」講師：下呂市 北村 裕次さん

生徒の感想

- ・とても感動しました。周りの人とは比べずに、自分のできることに目を向けて前向きに生きていくことの大切さを教えてもらいました。「10代は自分と向き合う時」と言ってみえました。私も、今の自分と向き合えたら本当に正しい答えが出るのではないかな、と思っています。「自分がどう生きるか」と考えた時に、たくさんの可能性があるから、まずは一歩踏み出して前向きに生きたいと思いました。これから先、どん底まで落ちるくらい悩むこともあると思うけど、そこまでいけばそれ以上のマイナスはないから、後は這い上がっていただけだと教えてもらいました。
- ・車いすで生活していても、車いすはマイナスじゃないことが分かったし、「今、幸せに暮らしているのは家族や奥さんのおかげで、かけがえのない毎日を過ごしている」と言ってみえて素敵だなと思いました。北村さんが言っていた、「自分の目の前にあることを一生懸命やる」ということや、「一歩踏み出すこと」という言葉が心に響きました。障がいの有る無しに関わらず、努力することが大切だと思いました。私も苦手なことがあっても、前を向いて生活していきたいです！！
- ・北村さんのお話を聞く前は、「不自由」というイメージが多かったのですが、自助具や周りの人の支えがあって、健常者と変わりがなく生活できることが分かった。また、「幸せだ」と言っているのを聞いて、普段、自分がマイナスに考えていたり、ネガティブに思っていたりすることが恥ずかしいな、と思いました。自分がどう生きるか、ということが大切だなと感じました。
- ・自由を奪われることは耐えがたいことだとは思いましたが、その分、できたことに喜びを感じられる瞬間が増えるということが分かり、お体が不自由な方への印象が大きく変わりました。これからの生活で何が起こるかは分かりませんが、前向きな心を忘れないようにしたいです。何かあったとき、そこで人生を終わられるのではなく、そこからどう幸せになるかが重要なのでは、と思いました。

○「盲導犬との暮らし」講師：八幡町在住 村土 智恵子さん

生徒の感想

- ・村土さんのお話のなかで、「見えなくなってすぐのころは物や人にぶつかったり、声をかけられて誰かが分からず気まずい思いをしたりした」と聞いて、私たちの日常が村土さんにとっては怖いものなのだと思います。しかし、「盲導犬と出会ってからは外出が気軽にできて毎日が楽しく、明るくなった」と聞き、盲導犬は目の不自由な方にとっては、なくてはならない存在なのだと分かりました。でも、盲導犬が働けるようになるまでの訓練には1頭300万円以上かかるということなので、自分は募金箱を見かけたら募金したいです。
- ・初めて盲導犬と出会いましたが、盲導犬は賢いと思いました。その盲導犬のお陰で、お体が不自由な人や目が見えなくても、楽しく幸せな生活を送っていることが分かりました。障がいがあっても、私たちと生活は変わらないのだと思いました。白杖を50cm上げることはSOSだと分かったから、道で見かけたら、声をかけて、自分から進んで手助けができる人になりたいと思いました。
- ・アイマスクをつけて競争しましたが、ほとんど見えなくて、普段授業を受けている教室なのに本当に怖かったです。白杖を持っていても、机や壁にぶつかってしまい、痛い思いをしました。良い体験でした。これからは町で、SOSサインを見つけたら優しく声をかけたいと思いました。

(3) 著名人の講演

○石川直生氏の講演

プロキックボクサー石川直生氏の講演を聞くことにより、プロとして生きていくことの厳しさや夢を持つことの素晴らしさを学んだ。普段は小学生向けの講演をしているということで、どちらかというとも向けの話し方であったが、本校の生徒にとってみるとそれが良かったようで、約200名の生徒が講演を真剣に聞くことができた。また、部活動を辞めてしまう生徒が多いという問題を抱えているが、継続することの大切さや壁にぶつかったときの話を石川氏自らの実体験をもとに語られたので、生徒にとって大きな意味を持つ講演になった。安易に嫌なことから逃げださないことが離職の防止にもつながると感じた。全体での講演の後は運動系部活動の生徒と意見交換がなされたが、生徒の質問や悩みにもアドバイスしてくださり、生徒にとって思い出に残る講演会になったと感じた。

生徒の感想

- ・夢を持つことの大切さを知った。私は夢をあきらめていたけれど、頑張ろうと思った。
- ・困難に立ち向かうことの大切さを知ることができました。
- ・継続することが大切だということが分かり、部活動を3年間続けていこうと思えた。
- ・普通の人と言っていたけれど、すごい人生を歩んできていると思った。
- ・母親が亡くなってしまったけれど、その壁を乗り越えていこうと頑張った石川選手の生き様に共感した。困難から逃げ出すことは簡単なので、まずは限界までやってみたいと感じた。

○ジョイマン氏の講演

社会に出てから必要なコミュニケーション能力（異年齢の同僚とうまくやり取りをするにはどうしたら良いかなど）を、著名人から学んだ。就職希望者が人間関係で早期離職をするという現状を考えたときに、いかに異年齢の人たちとうまく接していくかが重要だと感じた。吉本クリエイティブエージェンシー株式会社に相談し、ジョイマン氏を招いて講演を行っていただいた。岐阜県に住む芸人であるステレオ太陽族氏が司会をし、社会人になるにあたって大切にしてもらいたいことについて、実体験を交えながら講演いただいた。「あいさつ」「お礼をする」「初心に帰る」などの話をしていただいた。生徒にとっては小学生時代にテレビでよく観ていた芸人だということで、かなりのインパクトがあったようで、一生記憶に残る話となったと感じた。

生徒の感想

- ・「あいさつをしっかりとしなさい」といつも指導を受けるけれど、どの職場でも共通しているのだと思った。お礼などもしっかりとと言えるようにしていきたい。
- ・郡上市に芸人が来ると想像していなかったのが本当に驚いた。ただネタをするのではなく、社会人になるために必要なことを話してくださり、ためになりました。今日の経験を一生忘れないようにしたいです。

著名人から講演していただくことは、生徒にとって印象的で、その内容が一生のものになったのではないだろうか。平成26年度の入試や就職試験は不合格になる生徒が減少した。それは「初心を忘れない」「あいさつを大切にする」といった講演内容が生徒に身についたからだと考えられる。

(4) 大学・専門学校の見学

平成25年度に、進学コース1・2年生を対象に、「名古屋大学」「名古屋商科大学」を見学、ビジネスコース2年生を対象に「朝日大学」同3年生を対象に「大原簿記医療観光専門学校」、コミュニケーションコース2年生を対象に「あいちビジネス専門学校」へ見学に行った。

生徒の感想

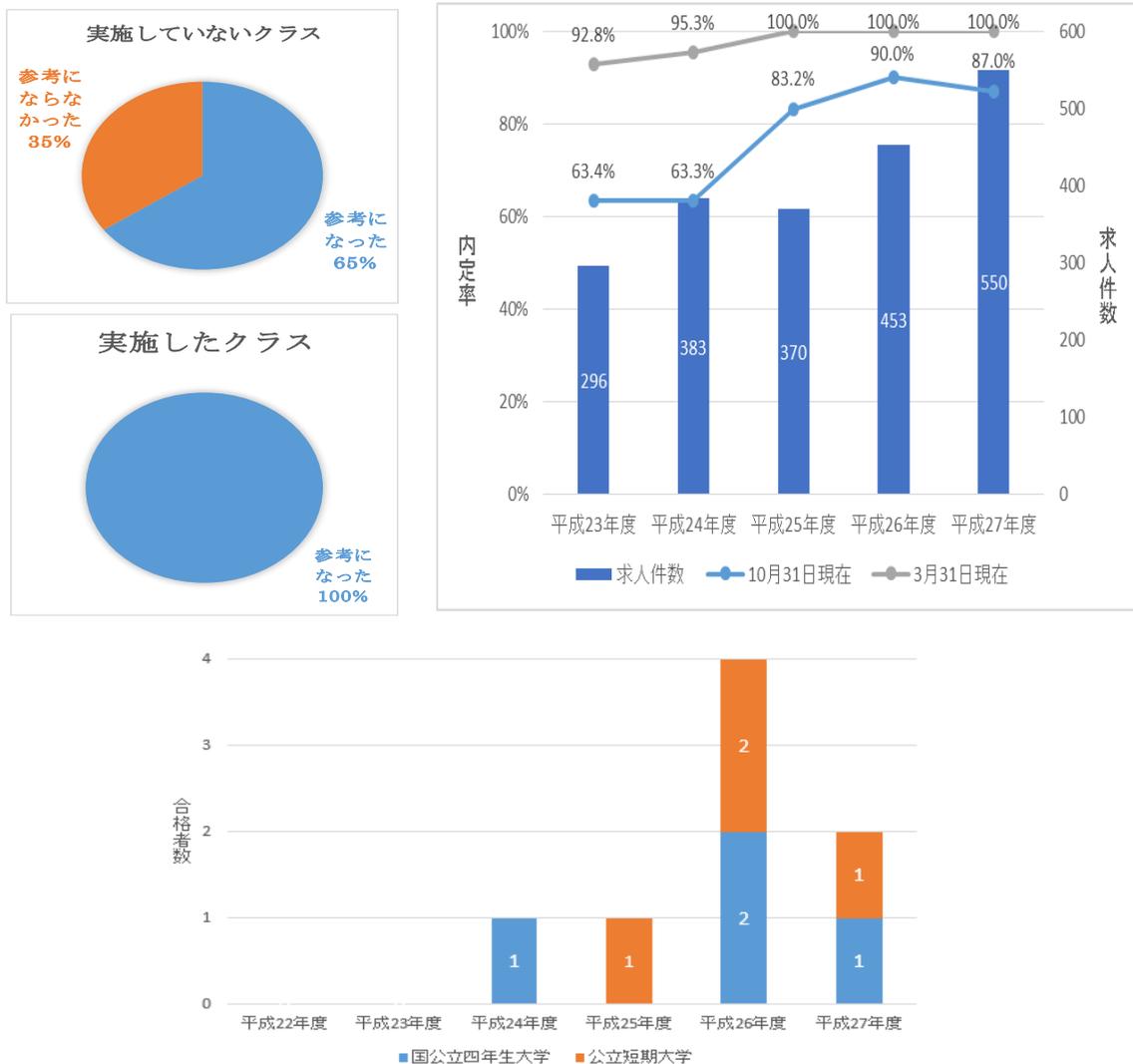
- ・看板1つ、掲示1つで店の雰囲気が変わるのだと思った。
- ・大学に進学してみたいという気持ちになった。
- ・大学の設備は高校とは比べ物にならないと思った。
- ・他校の生徒も参加しており、負けたくないという気持ちが芽生えた。
- ・他校の生徒が分からないことが分かったので自信がついた。

3 成果の分析

◎キャリア教育を行うことで、就職内定率が100%となり、国公立大学（四年制大学・短期大学）への合格者が毎年出るなど、生徒の進路意識が高まった。

- クエストエデュケーションプログラムを実施したクラスと実施していないクラスでは、総合的な学習の時間で行ったキャリア教育に対する意識に大きな違いが出た。
- 平成25年度から外部リソース活用研究事業で、既存の内容に加えて様々なキャリア教育を実施した。その結果、平成25・26年度は就職内定率が100%になった。また、平成27年度は10月31日時点の就職内定率が増加した。この増加は求人件数との相関関係は認められず、キャリア教育を実施した結果と言える。
- 本校からの国公立四年制大学・公立短期大学の合格者は数年に1名程度だったが、平成25年度に1・2年生（平成26年度・平成27年度卒業生）を対象に大学見学等を実施したことで、国公立大学・公立短期大学へ進学したいという意欲が高まった。その結果、平成26年度は国公立大学2名、公立短大2名、平成27年度は国立大学1名、公立短大1名が合格し、これまでにない成果を収めた。

【関連資料】



4 課題と今後の対応

◎予算が無い状態で事業を継続していくための模索

<課題>

- ・平成27年度をもって本事業の指定が終了することとなり、県からの予算措置がなくなる。

<対応>

- ・「公益財団法人パナソニック教育財団の研究助成」を申請し、これまで培ってきた地域活動でのノウハウを発展させ、地域との連携を強化し、生徒が地域で活動できる場の創設をめざしている。そのなかでは、ICT機器（タブレット端末）を活用し、生徒の情報の入手、集約および発信する力を育成し、地域に潜む資源や課題を見つけ、自ら解決を図っていくなかで高校生が地域とのつながりを深めるような活動を行いたいと考えている。その取り組みの計画の詳細は次に記すが、本活動は3年計画での実施を考えており、パナソニック財団による支援は1年目の環境整備に充てる。

5 平成28年度以降も継続する取組

◎地域との連携の強化

- ・地域と連携した取り組みを今後も続けていくだけでなく、さらに発展させていく。

平成28年度

<活動テーマ> 地域を知る

<活動内容>

- ・フィールドワークの実施
(郡上市白鳥町にある3カ所のWi-Fiフリースポットを中心とした範囲)
- ・フィールドワークの結果まとめ(タウンマップの作成)⇒地域の資源、課題の把握
- ・アンケート調査の実施
- ・ICT環境整備、地域連携ネットワークの構築
(岐阜県庁農政課・郡上市調理師会・奥美濃カレーファミリー事務局)
- ・道の駅「あゆパーク」への出品作の開発(ライフデザインコース)
- ・観光産業に目を向け「白鳥町の町おこし」を実施する。(ビジネスコース)
- ・クエストエデュケーションプログラム(ビジネスコース)

平成29年度

<活動テーマ> 地域でできることを探る

<活動内容>

- ・開発品の完成、普及活動(ホームカミングディ・ふるさとまつり)
- ・道の駅「アユパーク」での販売状況の分析
 - ・観光産業に目を向け「白鳥町の町おこし」アイデアを白鳥町に提案する。(ビジネスコース)

平成30年度

<活動テーマ> 地域へ発信する

<活動内容>

- ・文化祭、地域での販売実習
- ・岐阜県家庭クラブ連盟研究発表会での報告
- ・「白鳥町の町おこし」を実践する。(ビジネスコース)

6 成果の普及（予定を含む）

◎3年間の取組を地域の人に周知する

- ・平成28年2月18日に「外部リソース活用研究事業」研究成果報告会を実施。
- ・平成28年3月下旬に本校のホームページにて3年間の実施内容をまとめたものを掲載し、周知を図る。
- ・白鳥町内・郡上市教育委員会・郡上市内中学校に配布している回覧板を配布し、周知を図る。

7 自校の成果を他校が活用する場合の留意点等

◎他校の実践から良いものを取り入れる。

- ・市だけでなく、企業とも連携し「産・官・学」の連携ができた。これらの実践は他校の参観からはじまった。他校の実践を参観する場合は、取り入れられる部分が無いかを検討することが必要である。

◎地域のニーズに合った教育をする。

- ・郡上市は介護施設が多く、高校時代に専門的な知識を学んできた生徒を求めている。そのようなニーズを満たす教育をしている場合は、地域の協力を得やすい。